

戦時下、三年間の中学生生活

福岡市東区 大和 茂

入学

私が中学（旧制）に入学したのは1943年4月だった。2年前の12月8日、ハワイ真珠湾攻撃からはじまった第2次世界大戦の戦局は、すでにそのころから転機になっていたのだった。同年2月、日本軍はガダルカナル島を撤退しており、その2ヶ月後の4月18日、海軍大将山本五十六の戦死が報じられた。続いて5月29日、アッツ島守備隊が玉砕した。

銃後の私達の生活にも戦時色が強まり、ジャズなどは敵国の音楽として禁止。空襲に備えて動物園の猛獣は薬殺された。しかし、まだ国民の娯楽願望は部分的にはかなえられていた。

「勘太郎月夜唄」を歌ったり、映画「無法松の一生」を観ることもできた。その後情勢は変わり、6月に空襲対策として「防空待避壕」の整備が強制され、私たちは家ごとに防空壕を掘った。当時は重機はなく、すべて手作業で深さ2m位は掘っていた。

入学後、科目別に教師が替わって授業が行われるなど、目新しい教育の在り方向学心もわき、充実した中学生生活を送っていた。それもつかの間のこと、配属将校が着任し、軍事教練が教科に加えられ、長距離行軍や銃剣術訓練で過ごす日が多くなってきた。また、農家や飛行場に勤労働員されるなど、普通に授業を受ける日が少なくなった。

9月にはイタリアの無条件降伏を聞き、学友と同盟国の不甲斐なさをなじり、そのうちに、ドイツも同じ状態になるかもしれないなどと話し合っていた。予期せぬ学生生活を送る中で、10月21日明治神宮で行われた雨中の「出陣学徒壮行会」をニュース映画で見たときの感動は今でも忘れていない。この2、3年のうちには、自分たちもあのような事態になることを考えていた。

明けて1944年、2月になると軍事教育は全面強化され、3月29日、中学生の勤労働員大綱が決定した。

動員

新学期になって、教室で授業を受けるよりも、軍事教練、勤労働員に従事する日が増えてきた。時間割に合わせて教科書を持って登校しても、急に勤労働員に変更されることもあって、向学心は低下し、現状に甘えている自分の意志の弱さをどうすることもできずにいた。戦局は厳しさを増し、6月19日、日本海軍は、マリアナ沖海戦で空母・航空機の大半を失ってしまった。国内では大都市の学童集団疎開が行われていたが、福岡市ではまだ急ぐような動きはなかった。続いて1ヶ月後には、開戦時の東條内閣が遂に総辞職をし、政局面でも不安感が増してきた。

一般家庭では砂糖の配給停止。タバコは1日6本の配給になった。そのころ大人をまねて、祖父のタバコを失敬して吸ったが、むせて苦しみ、しかられたこともあった。

この厳しい戦時生活のなかで、文化面においては何らかの意図することがあったのか、菊池寛・吉川英治などの文壇主メンバーが、海軍報道班員として南方戦線に派遣されていたのだ。

一方、大衆娯楽面でも戦時体制が強まったが、「お山の杉の子」や「ラバウル小唄」が軽いメロディーにのって歌われ、映画は木下恵介監督の話題作「陸軍」が上映されていた。

欧州の戦局も同盟国ドイツは敗退を重ね、遂にパリ進駐のドイツ軍は降伏し、パリは解放された。同じころ、沖縄が米軍機動部隊の攻撃を受け、以後半年間にわたる攻防戦の火ぶたがきられたのである。その直後に日本は「神風特別攻撃隊」を編成。終戦に至るまでの間出陣を続け、多くの若い尊い命を南方海上に散らしたのだった。

2学期に入ると、8月に発令された学徒勤労令によって、授業の回数は激減し、学生は家から工場に直行した。私たちは九州飛行機香椎工場に配属された。当時歌われた「学徒動員の歌」は学生の士気をかきたてた。

『花もつぼみの若櫻、5尺の命ひっさげて国の大事に殉ずるは、……………』の歌詞は今も覚えている。

工場では海軍の対潜水艦しょうかい機「東海」を制作していた。はじめのうちは完成機内の清掃など軽作業を行っていたが、つぎつぎに工員が召集され、その人達の作業を私たち学徒が代わって行うことになった。組立・●鋳・塗装・検査・調整など行程の主体は学徒が担うことになった。

終戦

1945年の正月、この年は正月休みも一部返上して生産に励んだ。2年生の期末試験は終え、進級はしたけれど学力には全く自信を失くしていた。当時の状況では進学のことを考えることに引け目を感じた。しかし、気持ちの中には何とかなるかもしれないという思いもあった。先輩の中には陸士や海兵に進む者、同級生にも軍関係の学校を目ざす者がいた。

工場には他県から動員令で来た学生も多かった。彼たちは寮生活のため何かと不自由な日を送っていたと思う。なかでも「しらみ」騒動にはお互いに苦労したものだ。特に女子学生は大変だった思う。

2月17日、硫黄島玉砕。4月1日、沖縄本島に米軍上陸。欧州戦線ではドイツが連合国に無条件降伏のニュースが流れた。2ヶ月後の6月19日、福岡市は空襲を受け一夜にして市街地は焼土と化した。

工場からは完成機の輸送にも学徒の協力を依頼してきた。この仕事は安全策をとって、夜半に完成機を香椎工場の岸壁から台船にのせ、小型船で曳航して博多湾を横断、対岸の西戸崎に着岸し、人力で雁の巣飛行場に輸送する作業だった。これに参加すると夜食に握り飯が2個つくので希望者は多かった。

このころから「本土決戦」の声を聞かされた。政府や大本營の報道に対して、表面的には承知しているようだが、個々の間では疑心が生じていたと思われる。教師・工員・軍関係者それぞれの情報を持っていた。それを口にしないだけだ。少年だった私にもおぼろげながら戦局の成り行きは察知していた。

8月6日、広島に原爆投下。悲惨な被害情報が耳に入ってきた。続いて9日、長崎に投下。これですべてが終わったのである。

8月15日正午に放送された天皇の詔勅を、私はうつろな気持ちで聞いていた。